令和3年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文小学生の部 優秀賞（事務次官賞）

「　私にできること　」

鹿児島県　薩摩川内市立東郷学園義務教育学校　５年　篠原（しのはら）　菜緒（なお）

「バリバリバリッ、ドッゴーン。」

７月 10 日の夜、私は毛布を頭からすっぽりとかぶり、ベッドの中で丸くなった。はげしい雷の音。暗いはずの部屋が、雷の音とともに、ぱっと明るくなる。その度に、となりで寝ている妹のことが心配になった。「早く朝にならないかな。」そう思いながら目を閉じていたら、朝になっていた。

「おはよう。」

寝不足気味で、ふらふらとリビングに向かうと、いつもと違う光景が目に飛びこんできた。庭に大きな池ができていた。私があっけにとられていると、あわただしく歩いてきた母が言った。

「おはよう。着替えて。部屋の片付けを手伝ってちょうだい。じいちゃんたちが、うちに避難して来るから。」

大雨で，川内川がはんらん危険水位をこえ、避難指示が出たそうである。私は、「避難」という母の言葉を聞いて、少し怖くなった。

しばらくすると、祖父母やいとこの家族がたくさんの荷物と共に、避難をしてきた。池になった庭には、仕事で使っているトラックなど、全部で６台もの車が停められた。いつもと違う様子に、私は少し戸惑ってしまった。

学校では、避難訓練の時に、東日本大震災のことを教えてもらったことがある。大きな地震と津波で、多くの人々が、大事な家や家族を失ってしまった。川内川がはんらんすると、多くの人が同じような経験をするかもしれない。私の家族もそうなるかもしれない。そんな不安が頭をよぎった。その時、父の言葉を思い出した。

「この家はね、土砂くずれや水害の心配のない場所を探して建てたんだよ。菜緒が生まれて２カ月も経たないうちに、あの東日本大震災が起きてしまったからね。」

父は、よくこの話をしてくれた。私は、自分の家で、家族を守ることができるのだと思うと少し安心した。そして、家族みんながそろうということは、こんなにも心強いのだと感じた。

しかし、避難してきた祖父の顔は、元気がないように見えた。きっと自分の家のことが心配で仕方ないのだと思った。テレビでは、どのチャンネルも、大雨のことばかり伝えていた。

「大雨特別けい報、最大限のけいかいを。ただちに命を守るための行動を。」

そんな言葉が何度もくり返されていた。この言葉を聞くと、私はまた不安になった。しかし、このニュースのおかげで、みんなが「避難しないといけない」と思う。そして、川内川が本当にはんらんしたときに、命が助かるのであれば、大切なことだと思った。

また、ただ不安になっていても仕方がないと思い、

「私に、何かできることない。」

母にたずねた。それから、ご飯の準備を手伝ったり、いとこのお世話をしたりして過ごした。気付いたら夕方になり、川内川の水位も落ち着き、はんらんの心配もなくなった。私は、心の底からほっとし、体の力がぬけるような気がした。

「ありがとう。」

その言葉と共に、祖父母やいとこたちが、笑顔で帰っていった。

その日の夜は、となりでねむる妹の顔を見ながら安心してねむることができた。

私は、今回の経験で、災害の怖さを知った。その一方で、家族で一緒にいることの心強さも実感できた。災害は、いつどこで起こるか分からない。その時に、最大限できる行動をとることや、もしものときのために、しっかり備えておくことが大切であると気付いた。そして何よりも、何も起こらない日常が一番幸せだと感じた。